

みんなに届く

不登校支援事例集



兵庫県マスコットはばタン

兵庫県教育委員会但馬教育事務所
但馬地区ひょうご不登校対策地域会議

令和7年11月

はじめに

令和7年10月に文部科学省により公表された、「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、全国の国公立小・中学校における不登校児童生徒数は、353,970人と、平成25年度調査から12年連続で増加しています。

本県は、同調査において、公立小・中学校の不登校児童生徒数は15,456人と、前年の15,849人より393人減少し、過去10年間で初めて前年度を下回りました。

県では、令和5年度から「ひょうご不登校対策プロジェクト」を立ち上げ、県、教育事務所、市町、関係機関、学校等が全県一丸となって、不登校児童生徒を支援する体制を構築し、不登校対策を総合的に実施しています。

生徒指導提要には、不登校で苦しんでいる児童生徒への支援の第1歩として、「傷ついた自己肯定感を回復する」、「コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける」、「人に上手にSOSを出せる」ようになることを身近で支えること、と示されています。令和7年度、但馬教育事務所は、これら3つの視点に焦点を当て、8月に開催した但馬地区ひょうご不登校対策地域会議において、管内の小・中・義務教育学校でこれら3つの視点に基づいた不登校支援及び不登校対策を行うこととしました。

本冊子は、管内の小・中・義務教育学校から報告していただいた実践事例を紹介しております。不登校児童生徒の支援にあたっては、社会的自立に向け、個々の児童生徒の状況に応じた対応が重要です。本冊子が、各学校における不登校支援の一助となり、支援の充実につながることを願っています。

最後になりましたが、本冊子の作成にあたり、実践事例を提供していただいた学校をはじめ、関係の皆さまに深く感謝申し上げます。

令和7年11月

兵庫県教育委員会但馬教育事務所
但馬地区ひょうご不登校対策地域会議



傷ついた自己肯定感を回復する

- ・実践事例①（小学校）「集団生活、学習への不安」・・・1
- ・実践事例②（小学校）「本人の不安感」・・・2
- ・実践事例③（中学校）「学校生活への不安」・・・3
- ・実践事例④（中学校）「本人の不安感」・・・4
- ・実践事例⑤（中学校）「本人の不安感、安心できる居場所づくり」・・・5
- ・実践事例⑥（中学校）「本人の不安感」・・・6

コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける

- ・実践事例⑦（小学校）「本人の不安感とこだわり」・・・7
- ・実践事例⑧（小学校）「本人の不安感」・・・8
- ・実践事例⑨（中学校）「校内サポートルームの活用」・・・9

人に上手にSOSを出せる

- ・実践事例⑩（小学校）「本人の不安感」・・・10

※義務教育学校（前期課程）は小学校に含みます
義務教育学校（後期課程）は中学校に含みます

実践事例①【小・義務教育学校（前期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	集団生活、学習への不安
------	-------------	------	-------------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○	○	○

【児童の状況】

- ・前年度から不登校。
- ・学習に対する不安感、困難さが強い。
- ・保護者の不安感が強い。



【支援内容】

○学校の取組

- ・校内サポートルームの存在、過ごし方について情報提供。
- ・校内サポートルームにリモートで教室の様子や、授業の様子を配信。
- ・校内サポートルームで個別の学習支援。

○保護者との連携

- ・送迎時等に、担任又は校内サポートルーム支援員が保護者の思いを聴き、寄り添いながら安心感を高める。

【支援のポイント・工夫】

- ・校内サポートルーム支援員、地域ボランティアとのコミュニケーションを重視。
- ・話を丁寧に聴き、本人の意思を尊重し、安心感をもたせるとともに、自己肯定感を高める。
- ・校内サポートルームでリモート授業を受ける際には、パーティションで個室をつくり、集中できる環境をつくる。
- ・担任又は校内サポートルーム支援員から保護者に学校での様子を伝え、安心してもらう。



【成果、児童の変容】

- ・登校率の変化 2024年度24.2% → 2025年（9月末）81.5%
- ・自然学校、運動会など、行事に参加できるようになった。
- ・教室での授業に参加する意思を示す等、授業への前向きな気持ちが出てきた。
- ・児童の笑顔、保護者の笑顔が増えた。

実践事例②【小・義務教育学校（前期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	本人の不安感
------	-------------	------	--------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○	○	○

【児童の状況】

- ・前学年2学期の自然学校が終わった頃から体調不良や腹痛を理由に欠席することが増えた。
- ・前学年の間にSCとの面談や校内サポートルームの活用、校外教育相談センターの利用等関係機関と連携を行う。
- ・現学年になり、最初の1週間は教室で過ごしたが、その後町教育相談センターへの登校が続くようになる。保護者と面談を重ね、徐々に校内サポートルームに登校する日や教室で過ごす時間が増えてきており、欠席や遅刻・早退の日数が減っている。

【支援内容】

○学校の取組

- ・校内サポートルーム登校について教職員の共通理解と組織的な対応を行う。
- ・オンライン授業の準備やタブレットを活用した連絡のやりとりを行う。
- ・本人と保護者の意向を確認しながらスモールステップで支援する。
- ・友人と交流できる場の設定を工夫する。

○保護者との連携

- ・保護者との面談は定期的に行い、面談には担任だけでなく不登校担当、町教育相談センターも同席する。

○町教育相談センターとの連携

- ・センターを利用した日の記録が学校へ伝えられたり、学校で変化があったことをセンターに伝えるなど連携を密にして支援を行う。

【支援のポイント・工夫】

- ・本人の些細な気持ちの変化や気になる言動について、担任・校内サポートルーム支援員等・管理職が情報共有することで、校内サポートルームや町教育相談センターで本人がより安心して過ごせる環境を整える。
- ・担任・不登校担当・町教育相談センターが保護者とつながることで、一貫した支援につなげる。

【成果、児童の変容】

- ・校内サポートルームに登校できた日は、クラスの友達と休み時間や給食の時間に交流でき、人間関係の深まりを感じる
- ・安心できる場所とつながることで、家以外の場所で過ごせる時間が増え、学習にも気持ちが向くようになってきた

実践事例③【中・義務教育学校（後期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	学校生活への不安
------	-------------	------	----------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○	○	○

【生徒の状況】

- ・ 小学校5年生から不登校。
- ・ 体のことで定期的に小児科受診。腹痛、頭痛等の体調不良を訴えることが多い。
- ・ 見通しがもてない活動、体調面に対して、不安を感じる傾向にある。

【支援内容】

- 学校の取組
 - ・ 校内サポートルームの存在、過ごし方について情報提供。
 - ・ 校内サポートルームにリモートで教室の様子や、授業の様子を配信。
- 保護者との連携
 - ・ 校内サポートルームでの様子等、学校での本人の様子を担当及び校内サポートルーム支援員から報告。
- SCによる観察
 - ・ 観察から把握できた事実について不登校対策チームで情報共有。

【支援のポイント・工夫】

- 活動の見通しをもつことができる支援
 - ・ 教室の様子、授業の様子をリモート配信。
 - ・ 校内サポートルーム内に時間割表を掲示。
- 保護者との連携
 - ・ 家庭、学校での本人の様子を共有し、声かけのタイミングや方法、支援の方法などについての連携。

【成果、生徒の変容】

- ・ 登校率の変化 2024年度69.1% → 2025年度（9月末）90.1%
- ・ 校内サポートルーム支援員等との関係が構築でき、学校生活に対する安心感を得られた。
- ・ 自信と自己肯定感を高めたことにより、学校生活の中で笑顔が見られるようになった。

実践事例④【中・義務教育学校（後期課程）】

支援時期	課題早期発見対応	主な課題	本人の不安感
------	----------	------	--------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○		○	

【生徒の状況】

・前学年の2学期頃から授業に入りづらくなったため校内サポートルームを利用していたが、3学期には教室に入れるようになっていた。しかし、現学年の当初、クラス替えのなどをきっかけに不登校が続いた。気持ちの切り替えをし登校を再開したが、再び行きづらい日が増え、校内サポートルームを利用するようになった。

【支援内容】

○学校の取組

- ・校内サポートルームを利用する生徒の状況や利用の仕方を教職員で共通理解をし組織的な対応をする。
- ・校内サポートルームでは自主学習を基本とするが、リラックスするためのゲーム、学習教材、作業等の課題を自ら選んで取り組めるような環境を整えている。
- ・本人の意向を確認しながら毎週目標を設定し、それをもとに支援を行うようにしている。

○SCによるカウンセリング

- ・本人と面談し、不安や思いを聞く。

【支援のポイント・工夫】

- ・SCによるカウンセリングで本人自身のストレス軽減や自己肯定感の回復を図る。
- ・校内サポートルーム利用時には学習教材や得意な作業を本人に提案し、本人の気持ちに寄り添いながら意思決定をさせることで、本人が安心して取り組めるようにしている。
- ・教科担当が本人に授業内容を事前に知らせたり、短時間でも学習指導をしたりして、授業に入りやすい環境を整えている。

【成果、生徒の変容】

- ・1学期は不登校傾向であったが、2学期が始まってからは1日しか欠席しておらず、教室での活動も増えてきている。
- ・心身ともに疲れている時は校内サポートルームで休息することもあるが、提案した学習や作業に前向きに取り組むことができています。

実践事例⑤【中・義務教育学校（後期課程）】

支援時期	課題早期発見対応	主な課題	本人の不安感、安心できる居場所づくり
------	----------	------	--------------------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○		○	

【生徒の状況】

- ・4月当初より、給食やクラスの人数が増えたことによる対人関係の不安により、遅刻や欠席が増える。小学校時より、対人関係や給食の量に対する不安を訴えていた。
- ・1日のうち、1授業以上校内サポートルームで過ごす。
- ・給食は校内サポートルームで、校内サポートルーム支援員や学年の職員と食べる。



【支援内容】

- 学校の取組
 - ・職員会議や不登校対策委員会で、本人の状況について全職員で共通理解を図る。
 - ・入りにくい教科の授業や給食においては、校内サポートルームで、校内サポートルーム支援員や養護教諭などの見守りを受けながら過ごせるように環境を整備する。
 - ・本人の気持ちに寄り添えるような本の提供をする。
- 保護者との連携
 - ・学級担任を中心に、家庭訪問などを通して密に連絡を取る。
- SCによるカウンセリング
 - ・本人及び保護者と面談し、それぞれの思いなどを聞く。



【支援のポイント・工夫】

- ・本人の意思や頑張りを尊重する。校内サポートルームの利用を提案しながらも、本人が参加できる授業については教室に向かわせる。
- ・給食についての不安も、本人と相談しながら了承を得て、該当クラスに伝えることにより全体として支える環境を整えた。
- ・本人の不安感に共感するような本を紹介した。



【成果、生徒の変容】

- ・7月以降、自ら授業に参加する意思を示し、授業を抜けることがなくなった。
- ・9月より少しずつ教室で給食を食べることができるようになり、10月からは終日全活動を通して、教室で過ごすことができるようになった。
- ・読書感想文コンクールにおいては入賞を果たすなど、心の安定につながったと考える。

実践事例⑥【中・義務教育学校（後期課程）】

支援時期	課題早期発見対応	主な課題	本人の不安感
------	----------	------	--------

傷ついた自己肯定感を回復する

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○		○	○

【生徒の状況】

- ・ 小学校時は少人数学級であったが、中学校で1クラス35人以上の学級となったことにより、まわりの生徒とどう関わればよいか、不安を感じるようになった。
- ・ 学級で生活する場面では、極度に緊張している様子が見られた。
- ・ 前年度の1学期から、対人関係の不安を理由に欠席することが増えた。
- ・ 学力が高く、学習内容に対して、意欲がある。

【支援内容】

- 学校の取組
 - ・ 校内サポートルームを整備し、担当職員による学習支援体制を構築する。
 - ・ 校内サポートルームで、オンライン授業を受けられるよう環境整備をおこなう。
 - ・ 心の健康観察をもちいて、生徒の状況を把握する。
- 保護者との連携
 - ・ 自宅でオンライン授業に参加できる体制を整備する。
- SCによる支援
 - ・ 校内サポートルームの様子を参観し、声掛けやカウンセリングを行う。

【支援のポイント・工夫】

- ・ 本人の意思を尊重し、関係教職員が学習支援を行う中で、オンライン授業への参加を促す。
- ・ 学級担任、保護者、不登校支援員、SC等の情報交換を密におこなう。
- ・ 不登校支援員が教科担当と連携し、ICTで教室と校内サポートルームをつないで、技術や美術など体験活動を主とする教科のサポートを行う。

【成果、生徒の変容】

- ・ 本年度4月から、毎日、校内サポートルームに登校し、オンラインで授業に参加できるようになった。

実践事例⑦【小・義務教育学校（前期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	本人の不安感とこだわり
------	-------------	------	-------------

コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○		○

【児童の状況】

- ・幼少時から集団に入りにくく、こども園5歳児の夏頃よりほぼ登園していない。入学式も、別室よりICT機器を用いて場の様子を見る。
- ・選択性緘黙、ASDの診断を受けている。

【支援内容】

○学校の取組

- ・校内サポートルームを生活の中心とし、子どもサポーター、担任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭、学校生活支援教員（通級指導教室担当者）などで共通理解を図り、組織的な対応をすすめる。
- ・校内サポートルームでは、本児にあったペースで学習に取り組むとともに、小学校生活に慣れるような支援をする。

○保護者との連携

- ・登下校は母親が送迎しており、送迎時に子どもサポーターが様子を伝えている。不規則な登校時刻にも対応し、本児にあったペースでの登校を支援する。

【支援のポイント・工夫】

- ・今年一年かけて教室に少しずつ入れることを長期目標とし、少しでも不安感があるなら無理をさせないような関わりを心がける。
- ・本人、保護者の意思を必ず確認し、行事の参加などは本人の納得の上で行動させるようにする。
- ・本人が好きなこと（体を動かすことなど）を中心として、友達とコミュニケーションをとれる機会を少しずつ設定する。

【成果、児童の変容】

- ・入学前には、給食（野菜）がかなり不安だったが、野菜を完全に食べなくてもよいとした。その結果、今では給食だけを食べて登校する日もある。
- ・体を動かすことが大好きなので、そこから体育や学活や生活や図工の授業に参加したり、休み時間に友達と遊んだりすることもできるようになった。

実践事例⑧【小・義務教育学校（前期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	本人の不安感
------	-------------	------	--------

コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○	○	

【児童の状況】

- ・転校前の小学校で昨年度2学期から体調不良による欠席が増えた。（転入前）
- ・家庭の事情により、本年1月に児童のみで母の実家である祖父母の家に来る。
- ・令和7年2月から本校へ区域外通学になる。2月は1日のみ登校、3月は全て欠席。

【支援内容】

○学校の取組

- ・毎週定期的に校内不登校対策委員会を開催し、チームとして職員が共通理解しながら対応。家庭訪問を行い祖父母、保護者、前任校と連携を図る。本人の意向を確認しながら、本人と祖父母、学校の支援体制の橋渡し役をSSWが行う。4月～学校図書室の利用を勧め図書の貸し借り、健康診断等、週1回登校の計画で実行。5月～週1回、校内サポートルームで担任と授業が受けられる体制を整備。

○祖父母の家庭との連携

- ・祖父母が学校まで送迎し状況も報告する体制。SSWも相談体制を整備。

○SSWによる家庭訪問

- ・家庭訪問や家庭連絡を密に行い、児童理解を深める。

【支援のポイント・工夫】

- ・担任の家庭訪問は本人に対して精神的に登校につながらない状況から、SSWが家庭訪問や相談を通して、学校と家庭の架け橋となり本人の気持ちの開放につなげた。
- ・本人の気持ちに寄り添いスモールステップで支援を行う。
(図書貸し借り→校内サポートルームでの学習支援→入りやすい教科で学級に入る)
- ・登校した時は保健室を通して校内サポートルームへ入る。初めての学校なので本人の気持ちに負担のない体制で支援。

【成果、児童の変容】

- ・現学年になり、登校できる日が徐々に増えてきた。7月は週2～3日登校。9月以降、ほぼ毎日登校。
- ・最初は表情も硬く無口であったが、担任や養護教諭との会話も柔らかな表情で自然にできるようになってきた。
- ・同学年の人間関係も少しずつ慣れてきた。同じ地区の児童とつながりもできてきた。
- ・給食にも好き嫌いが多く抵抗感があったが、1学期最終日以降、本人が希望し給食を食べている。

実践事例⑨【中・義務教育学校（後期課程）】

支援時期	困難課題対応的生徒指導	主な課題	校内サポートルームの活用
------	-------------	------	--------------

コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室）	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等）	ICT活用
	○	○	○	

【生徒の状況】

- 不登校、登校しぶりの要因は、コミュニケーションが苦手、学業の不振、体調面での不安等様々である。
- 校内サポートルームを利用し、不登校児童生徒支援員と良好な関係を築いている生徒もいる。
- 市教育支援センターを利用している生徒もいるが、市教育支援センターまで遠距離で通所ににくいことが課題である。



【支援内容】

- 校内サポートルーム設置場所の工夫
 - ・児童生徒玄関と別玄関で入室することができる。
 - ・玄関から近く、他の児童生徒の動線と交わらない場所に設置。
 - ・個室やクールダウン部屋を作り、児童生徒が落ち着いて過ごせる空間を設ける。
- 遠距離児童生徒の送迎
 - ・市には自家用有償観光旅客等運送事業があり、これは公共交通空白地等の移動が困難な市民や観光客等に対して、移動サービスを行う事業である。校区は広いので、この事業を利用すると、遠距離で市教育支援センターへの通所が困難な生徒の通所が容易となる。



【支援のポイント】

- 不登校児童生徒支援員との連携
 - ・職員室に校内サポートルーム利用状況を共有できる掲示板を作成し、SC、SSWを含め、職員間で常に情報共有できる工夫をしている。
- 市教育支援センターとの連携
 - ・定期的に市教育支援センター職員との意見交換会を実施。
 - ・児童生徒の混乱を防ぐために、市教育支援センターのルールを校内サポートルームにも適用する。



【成果、生徒の変容】

- 児童生徒の校内サポートルーム利用数は増加している。校内サポートルームがあることで、担任と顔を合わせることができ、学校行事への参加や登校のきっかけとなっている。

実践事例⑩【小・義務教育学校（前期課程）】

支援時期	課題早期発見対応	主な課題	本人の不安感
------	----------	------	--------

人に上手にSOSを出せる

内容 (複数可)	校内サポートルーム（別室） ○	関係機関連携	多種職連携（SC,SSW等） ○	ICT活用
-------------	--------------------	--------	---------------------	-------

【児童の状況】

- ・一昨年度の冬から遅刻が増え、昨年度は欠席する日も目立つようになる。学習に対する不安な様子も見られ発達クリニックを受診し、ADHD・学習障害との診断を受けた。
- ・現年度は、朝起きられないことによる遅刻や欠席が続き、医療機関を受診したところ、ストレスが原因による慢性不眠症との診断を受けた。

【支援内容】

- 学校の取組
 - ・校内サポートルームなどで学べるよう体制整備を図る。
 - ・学校行事への参加は本人の意向を確認しながら目標設定を行い支援する。
 - ・1日の予定を事前に知らせ、どこまで参加できるか本人の気持ちを聞く。
- 保護者との連携
 - ・児童の情報を共有し、児童の内面理解に努め早期対応につなぐ。
- SCによるカウンセリング
 - ・保護者と面談し、不安や思いを聞く。

【支援のポイント・工夫】

- ・児童の不安を受容・共感したうえで、スモールステップでの働きかけを行い、児童ができた体験を積み重ねられるようにする。
- ・校内サポートルームでは、本人が落ち着くまで待つ。その上で、すべきことを提示して、児童の気持ちとのすり合わせを行い、折り合いがつけられるようにすることで児童の思いが表出でき、認められる場所になるように支援する。
- ・担任、校内サポートルーム支援員、保護者が連携した支援ができるよう、1日の予定表に当日の様子や頑張り等を書きこみ情報を共有する。

【成果、児童の変容】

- ・2学期に入ってから、欠席、早退する日が減っている。
- ・校内サポートルームの仲間と学ぶ中で、自分の意見を表出できる機会が増え、表情が明るくなった。



兵庫県マスコットはばタン